第34期新潟市社会教育委員会議　会議概要

第5回社会教育委員会議	
開催日時	令和3年5月20日（木）　午後3時～午後5時
会　　場	クロスパルにいがた4階　403・404講座室
出席者	【社会教育委員】 岡　昌子、小川　崇、角野　仁美、木村　いほ子、雲尾　周、笹川　博人、出頭　久美子、田中　一昭、田中　宏和、山田　久美子、渡邉　彩　　計11名　＊敬称略 【事務局】 本間教育次長、教育総務課教育政策室長、地域教育推進課長、中央公民館長、中央図書館長、生涯学習センター所長、生涯学習センター所長補佐、生涯学習センター職員3名　　計10名
内　　容	1　開会 2　教育次長あいさつ 3　委員自己紹介 4　職員自己紹介 5　報告事項 (1) 令和3年度社会教育関係当初予算について 〇報告資料1に基づき、各所属長が所管している事業及び予算等について説明を行いました。 【主な質問・意見等】 ・図書館の選書について、売れ筋の本にリクエストが集中するが、リクエストが多い本だけを購入し貸し出すことが良いのかと感じる。 ⇒新潟市では、どんなベストセラーでも全館に多くても1冊まで、上限は20冊と定めて購入している。 ・資料1枚目について、歳入歳出ともに前年度に比べて極端に増減のある所属について、理由を教えてほしい。 ⇒確認の上、後日お知らせすることとした。 (2) 教育ビジョン第4期実施計画の実施状況について 〇報告資料2に基づき、各所属長が所管している事業について説明を行いました。 【主な質問・意見等】 ・青少年健全育成事業について、指標が声かけ数となっているが、環境整備や青少年に還元されない活動もあると思う。活動内容についての指標に変えた方が良いのではないか。 ⇒若者の目に余る行為などに声をかけ、未然に防止するということを街頭育成活動のメインに据えているため、声かけ数が指標にならざるを得ないが、活動内容に変えたらどうかという意見について検討したい。 ・行政評価等は、指標を作るとその指標の事業だけに注目してしまうが、今後の方向性には指標にしていることだけではなく、もっと広いことをきちんと書くことが行政評価のあり方だと思う。 ・子育て支援事業について、乳幼児期の親子が利用できる居場所の需要はどの程度あるのか。保育所にも居場所が作られ始めているので、重複しているのであれば必要性が少なくなってきているのではないか。

	⇒子育てフリースペースを実施しているのは北区から西蒲区まで 16 館、81 講座あるが、どのくらいの人が使ったかという数値が手持ち資料にないため、確認の上、後日お知らせすることとした。 ・子育て支援事業について、幼稚園や保育園が行っており、子育て支援センターもたくさんある。新潟市も公立保育園があるが、予算の制限もあるので、市の中で連絡・調整等があって良いのではと思う。 ・各園で行っている子育ての支援の場に行きにくい方や、園を越えた交流の場など、明確な方針等を立てることも必要と思う。 ・コミュニティ・スクール推進事業について、予算は拡充されているが、モデル校が増えたことによる委員の交通費や支援員の方の人件費以外に、コミュニティ・スクールの推進に向けての新規事業やファシリテーションのスキルアップ講座などは予定されているか。スキルアップが必要と思うので、検討いただきたい。 ⇒増分はモデル校の数が増えたことによるもの。 ・子どもふれあいスクール事業について、ふれあいプログラムの活用がひまわりクラブとの連携に繋がるとのことだが、ふれあいプラグラムは何をやっていて、どのようにひまわりクラブと連携が取れるのか教えてほしい。 ⇒ふれあいプログラムは、これまで土曜活用プログラムという名前でパソコン教室や企業と協力した調理教室など行っていた。それをひまわりクラブと一緒に行うことで、ひまわりクラブとふれあいプログラムがお互いに連携を取り合うということから、それぞれの立ち位置が明確になり、さらに深まった一体的な取り組みということに繋がっていくと考えている。
内　　容	(3) 緊急提言「新型コロナウイルスの影響と社会教育」の実施状況について 〇報告資料 3 については事務局からの説明を省略し、各委員で資料を確認の上、質問がある場合は事務局に申し出ることとしました。 (4) しろねこ共育イベント参加報告について 〇報告資料 4 については参加委員からの説明を省略し、各委員で報告書を確認することとしました。 6　協議事項 (1) ワークショップについて 〇協議資料 1 に基づき、ワークショップの実施案について、生涯学習センター所長が説明を行いました。 【主な質問・意見等】 ・ワークショップのゴールについて、社会教育による次世代育成についてワークショップを行っても、どのくらい深まるのかという部分があるかと思う。おそらく初めて会う方とワークショップを行うわけで、その中で理解をどこまで深めるかという目標設定にするのか。それとも、関係領域のネットワークが広がったという目標設定の方向にするのか。 ・ワークショップで話し合ったことが次にどう生かされていくのかという意味では、集まって出たアイデアに対し、再度集まって、意見交換や各現場でやってみての振り返りなどがあるかも関係してくるのではないか。 ・対象者の社会福祉協議会職員の中にもいろいろな担当の方がいると思うが、直接社会教育とはあまり結びつかないように感じる。ボランティアなのか、それとも別の連携の位置づけなのか疑問に思った。

内　容	⇒社会福祉協議会で社会教育的な活動も行っている。ボランティアも社会教育に入ると思うので、担当している方に声がけをしてはと思っている。 ・プログラムの設計として、例えば参加者同士の意見交換で、オリエンテーションで課題の共有等をしてから、グループディスカッションでそれをどう前向きに持っていくか話し合うことはできるのではないかと思う。 ・そもそもなぜわざわざ集めて開催するのか。 ⇒社会教育委員がこのような提言をしていて、次世代育成が大事だということを、社会教育活動をしている方に理解してもらうことが大事なのではということで提案した。 ・公民館審議委員・図書館協議会は、地域の方を少しでも多く集めるにはどうしたら良いかを普段考えていると思う。私どもは、より具体的に公民館・図書館が何をすれば次世代育成になるのかを話し合うべきではないか。 ・課題の把握から入ってしまうと、今の取り組みの延長線上になるのではないか。いつもと変えて、こういうことが必要なのではないかというアイデア発散の場を設け、各現場ではこういうことを新たにやってみようという、アイデア提言をつけると良いのではないか。 ・プログラム案の中に、「6 グループに分かれ」とあるが、興味関心の近い方で集まるのか、あるいはざっくばらんに集まって同じような内容で対話をするのか、進め方によって変わってくると思う。 ・公民館運営審議会、図書館協議会などをミックスしたときに、興味あるテーマをどう立てるか。具体策を出すときに、そのグループの中で個々人がそれぞれ自分の行動を考えるのか、あるいはみんなで何かやれないかということを考えるのか。みんなで何かやれないかということを考えるならば、8 グループにしてその区の中でのコラボを生み出していくことになるのか。グルーピングと各グループでのテーマも検討材料になる。 ・「案 2」とすると、事例研究は次世代育成に関わって活動をされている方を呼び、事例に関してグループでこんな意見が出たということだと、分かりやすい。 ・「現状から」、「ずっと先の大きなビジョンから」とすると、参加者がイメージする次世代の対象がバラバラになり、噛み合わなくなってしまうのではないか。「案 2」は提案された事例についてなので、ピンポイントで次世代をイメージし、これをどうしていくかみんなが揃ってディスカッションできる。 ・参加者数を増やすにあたり、どういう講座運営や団体育成で効果があったかが事例の中で現れ、それを評価することで理解し、情報交換ができれば価値があると思う。また、公民館職員や行政担当者、ユースアドバイザーが、どういうスキルでアドバイスをしたかも話題になると思う。そういったものを出し合い、最後は連絡先を交換し、それぞれが持ち場に戻っても連携しながら成果を共有できるような形に持っていくことが良いのではないか。 ・次世代育成の捉え方も、団体それぞれで取り方が違うと思う。公民館や図書館が人を集めたいのと、次世代育成として人を集めることとは違うのではないか。 ・目的について、提言の周知の機会が一つ目で、二つ目が意見交換をする場を作ること、三つ目が参加者の活動へ繋げることと思うが、建議概要説明を 10 分受けた後に、自分のフィールドでどんなことができるのかということを話し合っていく場を作れるのではないかと思う。 ・社会福祉協議会の皆さんが来ても「私たちは関係ない」とならないか危惧される。

内　容	・県の社会福祉協議会でシニアカレッジをやっている。また、農福連携ということで福祉と農業を繋げている。広く言えば教育かと思うので、そう大きくずれないかと思う。逆に違った視点が入ってきて良いと思う。 ・高校の現場では、社会福祉協議会と一緒の居場所づくりや、高校生の取り組み支援という事例も生まれている。10 代を地域にどう繋ぎ、学んで活躍していくのか。新潟市の中でどう実現していくかということが必要と考える。 ・社会福祉協議会では視覚障がい者の方を小学校 4 年生の教室に招き、講師として話をしてもらっている。それに対して子ども達がお礼状を書いているが、視覚障がい者の方は読むことができないので、子ども達から直接音声訳してもらおうということで、ボランティア団体で福祉授業に協力している。目が見えないイコール点字と考えがちなところを、音声訳という方法もあることを子ども達にインプットすることで、活動の次世代育成に繋がるという認識を持っている。それが社会教育と福祉のネットワーク、コラボになると思う。白根高校の特殊詐欺防止のアナウンス録音を手伝うなど、若者と接点ができてきている。社会福祉協議会の役割は大きい。分野が違うから関係ないと思わず、いろいろな人とネットワークが作れる機会を作るということが大事で、そこからそれぞれの部署でさらに深めていくことを目指していけば良いのではないか。 ・来年からすべての学校でコミュニティ・スクールが入るので、その辺も絡めたい。角野委員の最初の講座が勉強になったので、そういうことも含めると良い。 子ども達が地域に対し興味を持ってくれるようになった。それは小学校からのコーディネーターの働きかけもある。もっと深くしていかなければと思う。 ・小・中学校のうちから自分の住んでいる地域に興味を持つことから始まり、地域の人との関わりから自分も何かできることはないかという気持ちを育んでいくことは良いと思う。それをいろいろな団体と一緒にやっていければ、視点も違うし、構成も違うし、良いと思う。 ・市では小・中学校は地域連携が進められてきて、それが今いろいろなところで花開いていると思う。その土台をさらに活かして、高校生も含めて、段階を上げていくことが、社会教育において求められているのではないか。高校生も地域に関わりたいと言うが、コーディネーターがいないこともあり、もったいないことになっている。そこをどう繋いでいけるかを議論したい。 ・次世代育成は二通りあると説明した上で、特に小・中・高校生世代に対しどんな働きかけをそれぞれができるかということをゴールとして設定し、それぞれが今どんなことをやっているかも共有しながら、今後どうしていこうかというイメージではないか。小・中学生と高校生では働きかけがかなり違うので、事例 1 が小・中学生、事例 2 が高校生という形になるのではないか。 ・小・中学生は岡委員と山田委員の事例を、高校の方で角野委員のお話を聞いてみたい。 ・市社会福祉協議会と区社会福祉協議会はそれぞれ役割も変わるので、両方に声かけをするということになるのではないか。 〇ワークショップは案 2 をベースとし、事例研究 1 は小・中学生世代を対象に、事例研究 2 は高校生世代を対象にする方向でさらに検討することとしました。 (2) 事例研究について 〇次回会議にて行うこととしました。 (3) 次回の事例研究について

内　容	〇第 6 回会議にて事例研究を予定している取り組み事例について、事務局から説明を行いました。 【主な質問・意見等】 ・質問や意見はありませんでした。 7　その他 〇第 5 回会議は、7 月 28 日（水）午後 3 時からクロスパルにいがたで開催の予定となりました。 8　閉会
傍聴者	0 名
会議資料等	・第 34 期新潟市社会教育委員会議（第 5 回）次第 ・報告資料 1　令和 3 年度当初予算 ・報告資料 2　教育ビジョン第 4 期実施計画実施状況【非公開】 ・報告資料 3　緊急提言「新型コロナウイルスの影響と社会教育」関連項目の実施状況について ・報告資料 4　「しろねこ共育イベント」参加報告 ・協議資料 1　ワークショップ：（仮テーマ）「社会教育による次世代育成について」 ・協議資料 2　さくら料理教室